
ある秋晴れの日

Sebolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある秋晴れの日に

【Nコード】

N79780

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

彼女を失った翔・・・あれから1年・・・ある秋晴れの日に偶然会ったゆりあに彼女の面影がかさなる。二人の運命は？

ある秋晴れの日に

ゆりあが彼を見かけたのは、ある秋晴れの空が青く澄みきっていた日だった。

雄太とシヨッピンセンターのカフェでお茶をしていたゆりあ、二人の会話が

途切れた瞬間、彼女の目に映ったのは、さびしそうに向つを見ていた彼だった。

よそ見をするゆりあに、雄太は声をかけた。

「どうした？」

「何でもないわ。」

ふと我に返るゆりあ

「ところで、これから映画見るんでしょ？」

「あっ……そろそろ時間だ。」

「そう、行きましょう」

二人は、映画館へ向かった。ゆりあが振り返るとまだ彼はそこにいた。

「行くぞ。」

「えっ……待って！」

「・・・待った。」

裕子が翔の目の前に立ち話しかけた。その言葉を聞いて彼女を見上げる翔・・・

「何だ・・・裕子か・・・」

「何だとはなによ・・・」

そう言いつつ裕子は、翔の前に座った。

「せっかく来たのに・・・ねえ・・・回りまじょうよ。」

「いや・・・やめとくよ」

「なんでよ・・・」

「じゃあ・・・一人で行けば。」

「なんで、私一人で行かないといけないの。」

「ちょっと、一人にしてくれないか。」

「もうっ・・・何なのよ、一体」

むくれて裕子は、去って行った。裕子を見送った翔・・・ため息をついた。

「残念ですが・・・」

翔はこの言葉が耳の奥からよみがえってきた。

一年前の秋

この日も澄んだ晴れの日。

それは一瞬の出来事だった。

歩道を歩いていた翔とゆきえ

「あぶない！！」

ゆきえの叫び声と共に翔の記憶がなくなった。

目覚めるとそこには、ゆきえと翔の両親が、

そして

翔の耳に入った一言が「残念ですが・・・」だった。

泣き崩れるゆきえの両親・・・

翔が目をやるとききれいな顔をしたゆきえが隣に横たわっていた。

翔の目覚めに気付いた両親・・・翔はただ涙を流していた。

あれから一年か・・・
そう思い翔は再びため息をついた。

映画を見終わったゆりあ、カフェの前を通ると、まだ彼がいた。
振り向く翔、ゆりあと視線があった。

しばらく、二人の時間が止まった・・・

「どうしたんだ！」

雄太の声がゆりあを戻した。

「いえ・・・別に」

雄太の方を振り返る

「お兄ちゃん・・・いい加減にしてよ」

再び裕子が翔の前に現れ、ボーっと遠くを見ていた翔をみて

「どうしたの・・・」

「なんでもない・・・」

裕子の横を見るとそこには見たことのない女性がいた。

「だれ？」

「あっ・・・友達の奈々枝ちゃん」

「奈々枝です・・・」

奈々枝はそう言つとペコリと頭を下げ、そして裕子に耳打ちをした。

「これが自慢のお兄さん？」

「ところで裕子お前の彼氏は？」

「何言ってるのよ。つれてきてないわよ。」

ばつ悪そうに話す裕子・・・

「そうか、じゃあ何か食べに行こうか。」

「やったあ」

喜ぶ二人だった。

ゆりあが振り返ると翔と裕子達が話しているのが見えた。

「いきましょっ」

雄太とゆりあは、ショッピングセンターを後にした。

大銀杏の寺で・・・

ゆきえの墓参りに来ていた翔、墓前で手を合わせ、なぜ・・・一人・・・俺を残した・・・翔は、そう心で話しかけた。そして、しばらく墓をじっと見つめていた。やがて、合わせていた手を元に戻し静かに立ち上がり、境内の方へ戻って行った。

ゆりあは久しぶりにあるお寺を訪ねた。

この寺は、大銀杏が有名だった。ゆりあとしてもこの季節に一度は見てみたいと思っていた。雄太も誘ったのだが結局一緒には来てくねなかった。お寺を回る趣味がどうも雄太には理解してもらえないようだ。

石段を前に立つゆりあ。そこで、ゆりあの携帯が鳴った。画面を見ると雄太からだった。

「ゆりあ・・・」

「雄太・・・どうしたの？」

「えっ・・・と、今晚会えるか？」

「えっ？今晚？どうして・・・」

今日は用事があると言っていた雄太が急に誘ってきたことに驚くゆりあ

「いいから・・・いつ戻ってこれる？」

「今からだと7時くらいかな・・・」

「7時？じゃあ・・・7時にいつもの場所で・・・」

「わかったわ・・・」

「たい・・・」

急に雄太の声が途切れ聞こえなくなった。

「もしもし・・・もしもし・・・雄太・・・？」

ゆりあが携帯を見ると電池が切れていた。

もうっ・・・そろそろ替え時ね、電池1日もたない・・・と思いつつゆりあは石段を上った。

一段一段と階段を上ると大銀杏がだんだん近づく、やがて山門のところまで上りつめるとその中から境内を一面黄色いイチヨウ葉の絨毯が敷き詰められ、その中に黄色く紅葉した大銀杏が凜と立っていた。

そして、黄色い葉がひらりひらりと舞うように降っていた。

わあ・・・やっぱり着てよかった

夢中でその風景にカメラを構えたゆりあ・・・

カシャ・・・

カシャ・・・

数枚撮った時だった

ファインダー越しに一人の男が入ってきたのが見えた。

彼の姿を見とれるゆりあ。

彼が振り向いた時

「あつ……」

無意識でシャッターを押していた。

そして

構えていたカメラをおろし、直接、彼をジーツと見つめていた。

振り向いた彼もまた、ゆりあを見ていた。

そこへ、ポツリ、ポツリと雨が降り始めた。

慌てて門へ走るゆりあと翔……

「あゝひどい目にあった。」

ポツリとつぶやくゆりあ、

ふと、ゆりあを見た翔には、その雰囲気かゆきえと重なった。

そして

「ゆきえ」

商はそう思わずつぶやいた。

「えっ?」

驚くゆりあ。

その言葉に、ゆきえでないことに気付いた翔はうつむいた。

降り続く雨の中・・・

山門に取り残された二人

雨は次第に強くなってきた。

しばらくして、二人に気付いた住職が、傘を持ってきた。

「この傘だったら、もって帰っていいから。」

「ありがとうございます。」

「ところで、大雨洪水警報がでたから、ここからのバスがでないぞ。」

「

「えっ?」

驚く二人

「ふもとに一軒民宿があるからそこに行って聞いたらいいぞ」

「ありがとうございます。」

仕方なく、ふもとに下りる二人、しばらく歩いてバス停へ行くと
本日運休”と張り紙が張ってあった。

「どうする？」

翔がゆりあに聞いた。

「困ったわね・・・私は、とりあえず駅まで行けるか聞いてみるわ。
あなたは？」

「おれ？ 俺は、民宿へ行ってみるよ。」

二人が分かれようとする、ゆりあ目の前に消防団員が来た。

「おい。どこへ行く？」

「わたし？」

「そつだ」

「こっちの方向へ」

「そっちは駄目だ。」

「なぜ？」

「川が氾濫寸前だ」

そう言ってその消防団員は去って行った。

「えっ？」

振り向くとまだ横には翔がいた。

「とりあえず行ってみる？」

「はい。」

二人は、川の近くまで来た。すでに警戒水位を超えており、水かさ
は橋の上までできていた。

「無理だろう。」

そう言った翔に対して、ゆりあは焦っていた。雄太と約束が・・・
そう思い

それでも無理して、行こうとするゆりあ。しかし、水に入っすぐ
に足を取られて、倒れそうになった。

「あぶない!!」

ゆりあの手をとり助ける翔

「痛い!!」

「何やってんだ!!死ぬぞ。」

ようやく帰れないことを悟ったゆりあ。

川から離れる二人、ゆりあは足を引きずっていた。

「大丈夫?」

「大丈夫・・・っ・・・」

歩けない様子のゆりあ、

「ほら・・・」

翔がゆりあの前で背中を向けしゃがむ

「えっ?」

驚くゆりあ

「ほら・・・乗れよ・・・」

「いいわよ・・・」

無理して歩くこととするゆりあだが、すぐに、痛みのおまじよるめく。

「ほれ・・・」

翔はゆりあに肩を貸し住職が言っていた民宿へ向かった。

雨宿り

民宿に着いた二人、女将が迎えた。

「ちょうどよかったわ。あと一部屋だったのよ。」

「えっ？」

二人は驚いた。

「あゝ」

ゆりあが聞こうとすると

「いいじゃないの、ご夫婦？失礼・・・カップルでしょ。」

「それ・・・」

女将が言つと

「じゃあ・・・俺は、いいわ」

翔が言つて出ようとする

「私が・・・」

「どうするの二人さん。」

少し怒り気味の女将・・・二人を見て

ため息をついたあと、二人の後ろに回り、

「もう・・・とりあえず。部屋へ・・・」

二人の背中を押した。

「えっ？」

「あっ？」

驚く二人は無理やり部屋に放り込まれた。

「お風呂は、一階だから・・・それとこれから、食事お持ちしますから・・・」

女将が部屋を出ようとした時だった。

「すみません。」

翔が女将に声をかけた。

「なんですか？」

「シップあります？」

「しっぷ？あると思うけど・・・どうしたの？」

「彼女、足くじいたみたいで・・・」

「そう、わかったわ、食事のときに持ってきてきます。」

女将は、部屋から去った。

部屋に残された二人

「あゝ」

同時に声をかけてしまった。

「そちらから・・・」

「いえいえ・・・そちらから・・・」

気まずい空気が流れる。

「すみません。今日は・・・」

そう話し始めたのはゆりであった。

「いえ・・・ところで、お名前は？」

「石原ゆりあです。あなたは？」

男は、少し考えて

「石原さんですか、俺は、樋口翔」

翔が話を続けようとする

「私、婚約者がいるんです。だから」

唐突にゆりあが言い出した。

「だから？」

怪訝な表情でゆりあをみる翔

「だから・・・」と話が續かないゆりあ

「ひょっとして・・・」

がっかりした表情をする翔

「いきなり、初対面の人にそんなことしませんよ。それに・・・」

「それに？」

「あっ・いや・なんでもない。」

話していると、女将が入ってきて

「食事の用意ができましたから。食堂まで、・・・あっ・・・これシ
ップね。」

そう言って女将はシップをおいて行った。

翔は、シップをゆりあに渡した。

「ありがとう」

受け取ったシップを張るゆりあ・

いけない・・・と携帯を見る。

しかし、電池がさつき切れたのを思い出した。

どうしよう雄太と約束をしていたのに・・・

一方、雄太は連絡がつかない、ゆりあに対し焦っていた。

「よいしょ」

立ち上がる翔、それを見ているゆりあ

「食事でもどうぞです?」

「あっ・・・はい。」

ご飯を持ってくる女将・

「女将さん」

声をかける翔

「なにか?」

「携帯の充電器ある？」

「ええ・・・」

「あとで、ちょっと貸してもらえます。」

「いいですけど・・・」

食事を済ませた二人、ゆりあは立ちあがろうとして、翔のほつを見ると

まだ座っていた。どうしたんだろう・・・そう思ったが、

「先に部屋にもどりますね。」

「はい。どうぞお先に」

席を立ったゆりあ・・・まあ・・・いいかと翔を置いてひとり部屋に戻った。

しばらくして、女将さんが充電器を持ってきた。

「それと、早く風呂に入ってくださいね。」

「はい・・・」

部屋に戻ったゆりあ・・・再び携帯を見たがやはり充電が切れて
いた。

どうしよう・・・本当に・・・どうやって・・・雄太に・・・そう
悩んでいる時だった。

「はい。」

翔の声のがしたなと思ったたら目の前に充電器を持っている手が見え
た。

「これは？」

「あ・・・さっき、女将から借りてきた。俺も充電しようと思って
いたけど・・・先にどうぞ」

そう言ってゆりあに充電器を渡した。

「ありがとう・・・」

民宿で

充電器を受け取ったゆりあ・・・そこへ女将が入ってきて。

「いめんよ。」

テキパキと布団を敷いて部屋を出て行った。

あっけにとられた二人、ふと目の前の光景に驚いた。

二つの布団がきれいに並べてあったのだ。

「ったく・・・」

翔はつぶやいて、布団を離し、間にテーブルをおいた。

「これでいいでしょ。だめだったら、廊下で寝るけど」

ゆりあはしばらく考え、

「これならいいわ・・・」

「じゃあ、俺、風呂行ってくるは、電話するんだろ・・・」

翔は風呂に行った。

ゆりあは、携帯に充電器をつけ、雄太に連絡した。

「ゆりあか!？、今どこだ?」

心配する雄太

「ごめんなさい。お寺の近くで、足止されて・・・」

「えっ?じゃあ、野宿してるのか?」

「大丈夫、民宿があつたから・・・」

「そうか・・・明日迎えに行くから・・・」

「いいわよ。」

「明日行くから」

「こなくでも、大丈夫よ一人で帰れるから」

「いや、行くから待ってる。」

雄太は、はやる気持ちを押さえ、店をあとにした。

電話が終わった頃、翔が部屋に入ってきた。

「いい湯でしたよ、入ってきたら?」

「そうね・・・」

ゆりあは風呂に行った。

風呂につきり一人考え事をするゆりあ・・・

今日のことを思い出す。

樋口翔・・・か・・・？

どっかでみたような？・・・と思いつつ

イチヨウの下で振り返った瞬間の彼の顔を思い出す。

何考えてんのよ・・・と自問自答しながら。

門の下で「ゆきえ・・・」とつぶやいた彼の一言

ゆきえって誰？

彼のことが頭から離れない・・・

それを振り払って、部屋に向かうゆりあ、一体どうしたの？と悩みながら部屋に入ると

???

あれ？

いない・・・？

驚いたゆりあは、部屋の外に出ると

布団をかぶって寝ている翔がそこにいた。

「ちょっと・・・」

翔をゆするゆりあ

「うん・・・」

布団にくるまり動こうとしない翔

「ねえ！！」

翔をゆするゆりあ

完全に眠っていた。

動かないと分かったゆりあは「仕方ない・・・」と部屋に戻った。

翌朝、朝食の最中、女将さんが

「ニュースよ。橋が渡れるようになったって、」

「本当ですか？」

客達は喜んだ。

「だから、お客様は帰れますのでご安心を・・・」

民宿を出た二人。

「ありがとう。」

これがゆりあの一言だった。

「ここでお別れだ。」

翔の言葉にふと足を止めるゆりあ、そして、振り返った。

「婚約者がくるんだろ。」

微笑みかける翔

「なぜ？」

「ごめん、昨日の電話聞こえたんだ・・・」

「そう・・・」

「じゃあ、いいで・・・」

「そうね・・・じゃあ・・・」

二人は、民宿を出て別れた。

橋の向うには、雄太が待っていた。

「大丈夫？」

「ええ・・・」

雄太の車に乗るゆりあ

車が動き出すと、目の前には、一人歩く翔の姿があった。

彼を追い抜く車・サイドミラーで彼の姿追いかけるゆりあ

「きのう・・・」

話し掛ける雄太。

「えっ？」

雄太の方をゆりあが振り返ると

「昨日、言うつもりだったんだけど・・・」

「なにを？」

「おっおれと、けっ・・・結婚してくれないか。」

それを聞いて驚くゆりあ

「えっ？」

「だから・・・俺と結婚してくれないか？」

言葉が出ないゆりあ、しばらく考えて、

「ちよつと・・・考えさせて、すぐにが、返答できないわ」

「なぜだ」

焦る雄太

「あのねえ、ちよつとは、私のことを考えてよ。」

「そうだな・・・ごめん・・・また日を改めるから、今の聞かなかったことにしてくれ・・・」

再会

「ゆりあさん・・・」

給湯室で、お茶の準備をしているゆりあに声をかけてきたのは、奈々枝だった。

「ななえ・・・」

「昨日、大変だったわね。」

「まあ・・・」

「最近の異常気象のせいかしら。」

「かもね・・・」

「あっ・・・そうそう、今日、あなたのプロジェクトに協力会社の人
が来るんだって。」

「ええ・・・そうよ。それが？」

「その中にすごいイケメンいるのよ。」

「そうなの？なんで奈々枝が知ってるの」

「この間、親友の裕子とあったんだけど、お兄さんがもう・・・かつこ
よくて・・・」

「で？」

「たまたま、会社のことを知っていて、聞いたらびっくりよ……」

「それで、名前は？」

「ゆりあさんには雄太さんがいるじゃない。」

「そうだけど、気になるじゃないの。」

「樋口さんって人。」

「樋口？」

ゆりあが怪訝そうな顔をする

「そう、どうしたの」

「あっ、いやなんでもない。」

「ゆりあさん、協力してね」

「いいわよ」

「じゃあ」

そう言って奈々枝は去って行った。

樋口？ってまさかね……

ゆりあが事務所に戻ると、

「石原さん・・・そろそろ会議ですよ。」

「あっ・・・いけない」と会議室に向かった。

ボタンとけたたましい音と共に

「すみません・・・遅れました。」

そう言つて会議室に入り頭を下げるゆりあ・・・

「遅いじゃないか・・・」

「すみません・・・」

しまった・・・大事なときにと思い頭があげられないゆりあ。

「まあ・・・いい・・・とりあえず座りなさい。」

そう言つ上司の一言で、席に座ろうとした時

「大原君だ・・・こちらは、今回のプロジェクトで内装のデザインをする東城プランニングの方たちだ。」

「はじめまして、大原です。よろしくお願いします。」

それぞれと名刺を交換するゆりあ

「担当する秋田です。」

一人一人挨拶が始まった。

「設計の岡野です。」

「小宮です。」

「チーフデザイナーの樋口です。」

ゆりあはこの声を聞いて、えっ？樋口？と顔をあげると

そこには

大銀杏の寺で会った彼がいた。

「はじめまして・・・石原です。」

驚いたゆりあだったが形式通りのあいさつをした。

それを聞いた翔は驚いた。

しかし、

彼女が知られたくないのだろうと思った彼は挨拶をあわせた。

「はじめまして。」

こうして会議が始まった。

ミサンガ

会議が終わり、翔が会議室を出ようとしているゆりあに声をかけようとした時、そこには、奈々枝が待っていた。翔を見つけ声をかけた。

「樋口さん。」

「・・・藤村さん。どうしてここへ？」

「そんなことどうでもいいじゃない。ねえ、ゆりあ、かつこいいでしょ。」

奈々枝が翔の手に抱きついてゆりあに言った。そして続けた。

「私が見つけたんだから・・・ゆりあは手を出さないでね。さあ・・・行きましょう。」

持っていた手を無理やり引っ張った。

その光景を見ていたゆりあ、彼の手に古くなったミサンガが見えた。

ミサンガにはローマ字で”Y・K”と書かれていた。

ちょうど、そこへ、雄太がやってきてゆりあに声をかけた

「ゆりあ」

「雄太さん・・・」

「今晚、飯でもどろだ？」

「ごめん・・・今日は。懇親会があるの・・・」

「そうか、大変だな・・・」

そついい残し雄太は去って行った。

無理やり引つ張り出した奈々枝は翔に迫った。

「今晚、つきあつてよ。」

返事は、あつさりしたものだつた

「懇親会があるから、」

「じゃあ。今度は？」

「今は、新規の仕事なんで、落ち着くまでは無理だよ。」

かなり落胆する奈々枝だつた。

しかし、最近流行の肉食系女子の奈々枝、こんなことではへこたれてはいなかった。

懇親会で、ゆりあは翔と話す機会があつた。その時、やはり翔の左手のミサンガがどうも

気になって仕方がなかつた。そのことを考えていると翔が話しかけ

てきた

「石原さんがデザイン担当なんですね。」

「はい。」

「ところで、今回のコンセプトは？」

「そうですねえ」

と仕事の話をしつつ、ゆりあは思わずミサングのことを聞いてみた。

「ところで、そのミサング・・・」

「あっ？これ？」

腕を上げ、ミサングを見せる翔

「そう・・・」

「なぜそれを？」

「これ？前にもらったんだ。ところで、なんでそんなことを？」

「あっ・・・いや・・・ちょっと珍しかったもので」

言葉を濁すゆりあ・・・

「そうですね・・・」

実は、ゆりあも同じものを持っていた。ただし、ローマ字は”Y・I”の・・・
なぜ、私とおそろいのミサンガを持っているの？
しかも、”Y・K”なの？樋口翔ではないし・・・？

懇親会が終わった。

前の彼女を忘れるには・・

家に帰った翔・・・

妹の裕子に

「奈々枝から連絡あったわよ」

「そうか・・・」

「いい加減に、新しい人見つけたら？」

「何を言ってるんだ。」

翔は、少し声をあげた。

「本当に・・・女の腐ったみたいに・・・」

逆切れする裕子、そこへ近づく翔・・・

だんだん顔が裕子に近づく・・・

「なっ・・・なによ・・・」

「お前に何が分かる？それともお前がなぐさめるとでも？」

「出来るわけないじゃない。」

「そつだろ」

裕子から振り向いて離れよつとする翔

「けど・・・」

「けど？」

「奈々枝は本気よ」

「だから？」

「奈々枝だったら、きっとお兄ちゃんを助けられるって。」

「それはお前の考えた方だ。」

「でも・・・でも・・・」

「でも・・・」

「もついないのよ・・・」

しばらく、沈黙が続いた。

「.....」

翔は、部屋に戻ろうと歩き始めた。

「お兄ちゃんのバカ！！！ ゆきえさんを忘れるには、新しい恋をするしかないのよ。」

叫ぶ裕子

「……………」

翔はそのまま部屋に入り、ベットに横たわった。

そして、ミサंगाをみて……

「これ……私のお守りなの……大事なあなたがつけて……」

楽しそうに笑顔でミサंगाをつけるゆきえの姿を思い出す翔……
そして、ため息をついた……

「新しい恋をしろ……か」

しばらくして……

ふと……

ミサंगाのことを聞いてきたゆりあの顔
そして、イチヨウの木の下から見たゆりあを思い出した。

まさか・・・な・・・

そう思った翔は、一人目をつぶった。

一方、家に帰ったゆりあ・・・

自分の部屋で、ミサंगाを見ていた。

このミサंगाは、彼女のお守りだった。

しかし、いつ、誰が、くれたのか分からなかった。

そして、なぜ樋口さんが、同じものを持っていたのか？

そんな疑問を感じつつ、ゆりあも眠りについた。

落し物

プロジェクト会議が終わり、お疲れ様と言いいながら会議室を出る時だった。

それは、一瞬の出来事だった。

奈々枝が翔を見つけ駆け寄ってきた。

「樋口さん」

「藤村さん？」

振り向き話をしようとする翔の手を引っ張った。

「今日こそ付き合ってくださいね」

「え？」

「約束でしょ？」

そのまま有無を言わず、翔を連れ去った。

一瞬の出来事に残されたプロジェクトチームのメンバーは呆気にとられていたそんな中にゆりあもいた。

「あいつもてるからな」

「けど、彼女のことあるから無理だよ。」

「そうだな。」

「彼女って?」とふと聞いたゆりあ・・・

「石原さんも、気になる?」

少し戸惑うゆりあ

「だって・・・そんな話が出ると気になるものよ。」

「そうだな・・・実は樋口の彼女、事故でなくなってるんだ。1年前に・・・」

そのことを聞いて、驚くゆりあ

「だから、さっきの彼女に、早くあきらめるよう言ったほづがいいぞ」

「そうね・・・」

ゆりあを残し、みんなが立ち去った。

ふと足元を見るとミサシガが・・・

これ・・・樋口さんの・・・と思い拾い上げた。

いったん事務所に戻ったゆりあは、ミサंगाを見ていた。

やっぱり・・・私のおそろいだと確信した。

ふと時計を見ると、8時を回っていた。

もうこんな時間？

慌てて会社から出る準備をしていた。

無理やり食事につき合わされた翔。

「樋口さん・・・私と付き合ってください。」

奈々枝は目の前の翔に言った。しかし、翔の返事は

「妹の紹介だから、今日は付き合っただ。頼むからしばらくそっ
ととしてくれないか。」

翔はため息をついて、自分の腕を見た。

ミサंगाがない・・・

どこで落としたんだろうと焦る

「じゃあ・・・これで

店を出ようとする翔

「じゃあゝって・・・ちよつと」

「急用を思い出した。」

伝票をとり席をたつ。

「ちよつ・・・ちよつと」

「ここは、俺が払つとくから・・・」

そついい残して翔は会計を済ませ、奈々枝をおいて店を出て行った。

急いで会社の戻る翔、

そして、

ロビーでゆりあとすれ違う

「樋口さん」

声をかけるゆりあ

「石原さん・・・」

立ち止まる翔

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっと、忘れ物を……」

「忘れ物？」

「そうです。たぶん会議室に……」

「ひょっとして、これですか？」

そう言うとゆりあがミサンガを翔に見せた。

「それ……どこで……」

「会議室の前に落ちてたわ。」

「ありがとうございます。」

「大事なものでしょ。手を出して。」

翔が手を出すとその手にミサンガを結びつけるゆりあ

「大事なお守りなんでしょう……しっかり結ばないと。」

その姿……言葉に驚く翔、彼女の姿がゆきえと重なる

「さあ……できた。」

ゆりあが翔を見ると彼はぼーっとしていた。

「どっしたの？」

その言葉に気付いた翔は

「あっ・・・いや・・・」

言葉を詰まらせたが

「そういえば、なぜ？お守りだと？」

「ただ・・・」

「ただ？」

「そう思っただけよ・・・じゃあ・・・」

ゆりあがロビーから出ようとするとき自転車とぶつかりそうになった。

「あぶない・・・」

彼女を引っ張り抱きしめる翔・・・

その光景を奈々枝は見てしまった。

抱き合うふたり・・・しばらくして、

「ありがとう・・・」

ゆりあの感謝の言葉に慌てて離れる翔

「あ・・・」

「じゃあ・・・」

「じゃあ」

ふたりはばつ悪そうに別れた。

帰りの電車の中・・・ゆりあは、しばらく、止まらない鼓動に戸惑った。

一人歩く翔、気がつくとき抱きしめた彼女を思い出していた。

予感

翌日、ゆりあを待っていたのは、怖い顔をした奈々枝だった。

「おはよう。」

その声をかけたゆりあ、奈々枝の顔を見て怒っているのがわかった。

「どうしたの？」

「どうしたのって？」

怒り出す奈々枝。

不思議そうに見るゆりあに対して

「かわいい顔して……よくも……」

「なんなのよ。一体？」

「私見たんだから。」

「だから、何を」

「抱き合ってるのを」

「誰が？」

「そこまで、しらばっくれる気？」

そこに、雄太が通りかかっていた。

「本当になんなの？」

「昨日、樋口さんと抱き合っていたの見たんだから。」

「えっ？」

驚くゆりあ

その声は雄太にも聞こえていた。

「どうなのよ・・・答えなさいよ・・・」

声をあげる奈々枝

「なんだそのことか・・・」

へーゼンと答えるゆりあ。

「何だとは何よ。じゃあ、あなた達そんな関係なの？」

そこへ

「本当なのか!!」

雄太が入ってきた。

「なあ・・・ウソと言ってくれ。」

「もう・・・最後まで私の話を聞きなさい。」

ゆりあが声を上げた。

「じゃあ・・・いいなさいよ。」

「本当に・・・昨日、会社を出た時に、自転車にぶつかりそうになったの。」

それを樋口さんが危ないって、手を引いてくれたの、そしたら、倒れそうになった

わたしと抱き合う格好になったの。ただ、それだけよ・・・」

「本当？」

「本当か？」

疑う二人

「本当よ。ただそれだけのことよ・・・」

「じゃあ・・・付き合ったりしてないわよね。」

聞きなおす奈々枝

「だって、2回しかあってないのよ。どうやって付き合っつの」

「じゃあ・・・なんで、樋口さんが会社にいたんだ。」

今度は雄太が聞いてきた。そこへ、奈々枝が続けた。

「そうよ、急用を思い出したって、私を置いて帰ったのよ。ひよつとして、ゆりあに会いに来たんじゃ・・・」

奈々枝の言葉にあきれるゆりあ・・・

「ば・・・」

言葉に詰まったゆりあを見て奈々枝は

「ひよつとして？ 凶星だった？」

「ゆりあ本当か」

思わずゆりあの両肩を持ち叫ぶ雄太、ゆりあは両手を前に出しその手を払いのけた。

「あのねえ・・・あなた達・・・樋口さんと私をくつつきたいの？」

「そんなこと言ってないわよ。」

「だって・・・そうとしか思えないじゃない・・・」

「開き直る気？」

「開き直るですって？樋口さん偶然戻ってきただけじゃない。なんで私がそこまでいわれないといけないの？」

「じゃあ・・・なぜ？ 樋口さん？会社に戻ったの」

「それは・・・忘れ物をとりに来たのよ。」

「なんでそんなこと知ってるのよ。」

「樋口さんから聞いたの」

「じゃあ、なぜ、ゆりあがいたんだ。」

「あたしは、仕事で残っていただけよ。本当に疑り深いのね、お二人さん。もういいわね・・・」

ゆりあは、二人をおいて、仕事場へ向かった。

そこには、翔が一人でした。

「一人ですか・・・」

「はい。」

振り向く翔、どきっとするゆりあ・・・

「今日は、石原さんと打合わせだと聞いてますが。」

話しかける翔をじーっと見つめるゆりあ・・・

「石原さん！！大丈夫ですか？」

言う翔の一言が彼女をわれに戻した。

「あっ・・・いや・・・」

「どづしたんですか？」

「別に・・・さて・・・打ち合わせを始めましょう。」

二人は打ち合わせに入った。

木枯らしの中

この日は、現地視察の日だった。

長の橋本、三宅、岩本、ゆりあと翔は、候補地を視察に2台の車に分乗して行った。一台は、プロジェクトチームの、そして、もう一台は翔の車だった。視察自体は午前中で終わり、少し離れた島に海産物のおいしい食堂で昼食を取り、その後は自由行動となった。

ゆりあは、食堂から見えた建物がふと気になった。そして、昼食後、外に出てその建物の方を見ていた。すると橋本がゆりあに声をかけた。

「石原さん、帰りますよ。」

ゆりあは、振り返り、見ていた建物を指差し

「あつ・・・わたし、そのこの建物に興味あるから、ちょっと、よって来ます。」

「一人で大丈夫ですか？」

「ここ・・・フェリーもあるみたいですし・・・後で一人で帰れますから・・・」

「そうですね・・・」

ゆりあを残しプロジェクトチームの皆は先に島をでた。

チームが橋をわたりはじめると風が吹き出した。

「だいぶ吹いてきたな……」

すると、その風は次第に強くなっていった。

橋をわたりきつたところの料金所でおじさんが

「君達は運がよかったな……」

「えっ……」

「もうすぐこの橋……通行止めになるから」

さらに強い風が吹き始めた……

木枯らしだった……

ラジオからは波浪警報が発令されたとチームの皆に聞こえた。ゆりあを一人置いてきたことを後悔していた一同

「どうする？」

そう相談をしているとことに橋本の携帯にゆりあから連絡が入った。

「石原さん、大丈夫？」

「すみません。勝手な行動をして、今日は、戻れないみたい。」

「そうか、我々は、今日帰るけど、どうします。」

「明日、休みください。明日、移動します。」

「そうか、気をつけて」

「みんな、これから帰ろう。」

一同が帰ろうとした時だった。翔が橋本に声をかけた。

「橋本さん」

振り返る橋本に翔は頭を下げ。

「じゃあ、私はここで。」

「そうだな、樋口君、お疲れ様・・・じゃあ。また」

橋本たちは翔を残し帰って行った。

「どうしよう・・・帰れない。」

フェリー乗り場に着たがすでに出港した後だった。しかも、次の便の決行が決まっていた。

落胆し待合室に一人座るゆりあ

その頃、翔は車で橋を渡り島に戻っていた。

島内を探したが、ゆりあが見つからない。

やがて、強風のため、橋は通行止めになった。

フェリー乗り場についた翔、

そして、休憩所でうつむいているゆりあを見つけた。

「石原さん。」

その声に顔を上げ、翔を見たゆりあ、

「樋口さん……なぜ？」

「石原さんを迎えに……と思ったんだけど」

「なぜ私を？」

「まだ……間に合うと思って……」

「間に合う？って」

「橋は、通行止めになってなかったから……」

「じゃあ……帰れるの？」

喜ぶゆりあに

「もう……」

「そう……」

あきれぬゆりあに

「ホント？携帯すりゃよかった。」

「そうよ。なぜ。かけてこなかったのよ。」

「すまない。」

その言葉を聞いて、ふっと笑みを浮かべるゆりあ

「本当に…… 行きましょう。」

ゆりあは席を立った。

「どこへ？」

「じいじや、寒いでしょ。」

二人は、昼食を取ったお店に行き、そこで、食事を取った。

店の主人に、近くに泊まるところがあるか聞いてみた。

「近くに、浜田屋があるから行ってみたら？」

しかし、浜田屋は満室だった。

「他に宿泊できる場所は？」

店主に聞く翔

浜田屋の主人も当たってくれたがすでに満室だった。

「どうする？」

聞くゆりあに

「ちょっと待ってて」

浜田屋に戻ろうとする翔……

「どうしたの？」

「キャンプ場がないか聞いてくる」

「キャンプ場？この寒いのに？」

しばらくして、戻ってきた翔

「石原さん……浜田屋で泊まれるって。」

「えっ？さつき・・・」

「聞きに、行ったら、一人なら寝れるところがあるって。」

「あなたは？」

「別の民宿で、あけてくれるそうだから、そこに行くよ。」

「そう、よかった・・・」

ゆりあは、浜田屋に泊まれることになった。

翌朝、浜田屋を出るとそこには翔の車があった。

中では翔が眠っていた。

それを見つめるゆりあ・・・

やがて、そつと助手席に乗り、眠っている翔の顔をそつと手を伸ばした。

かわいい寝顔をして・・・と思いつつ・・・髪に手が触れた。

その時、ふっと翔の目が開いた

「おはよう」

ゆりあの顔を見て驚く翔

「おはよ・・・」

「どろして車で寝てるの？」

「あ・・・いや・・・」

言葉に詰まる翔、それをゆりあが見つめ、そして

「ありがとう・・・」

「・・・」

言葉が出てこない翔、慌ててエンジンをかけた。

「帰りましよう・・・」

過去

ゆりあは、ミサングのことが気になっていた。

思い切って父親に聞くことにした。

自分は、父親の連れ子であることは、前から知っていた。

それ以上のことは、よくしてくれる母や、弟に悪いと思って聞いていなかった。

「お父さん・・・」

「なんだゆりあ」

「ちょっと聞いていい？」

「なんだい。」

「これなんだけど・・・」

自分のミサングを見せた。

「これは、お前のお守りだよ。」

「それくらい知ってるわよ。これは、お父さんがくれたものなの？」

ゆりあの父は、ため息をついて、焼酎を一口飲んだ。そして、

「今度、一緒にのみに行こう。そのときだ」

「わかったわ。で？ いつ？」

「うん。金曜日は？」

一方雄太は焦っていた。

この間は、洪水のせいで、はぐらかされた。

そして

樋口とのことも気になる。

だから

早くプロポーズをして、決めたいと・・・

そして

ゆりあがいる部署に行き声をかけた、

「今週の金曜は、あいてるか？」

「ごめんなさい。先約があるの。」

「先約？誰と・・・」

「お父さんと。」

「そうか・・・仕方がないな。じゃあ、今度にしよう。」

「ごめん行かなきゃ・・・」

ゆりあがその場を立ち去った。

そこには、電源の入ったデジカメがあった。

ゆりあのやつ・・・と電源を切ろうとするとそこには

イチヨウの葉が舞い散る中で、振り返った翔の姿があった。

金曜・・・

「おとうさん。待った。」

待ち合わせをした二人。

「ああ・・・」

近くの居酒屋に入り、いつもの個室に入る。

「久しぶりね、二人で来るの・・・」

「そうだな。就職祝いとき以来だもんな。」

「あの時、大変だったのよ。お父さん飲みすぎで・・・」

「ごめん・ごめんついれしくて」

「今日は勘弁してよ。」

「大丈夫・・・」

「ところで・・・あのミサングのことなんだけど・・・」

「そうだな。」

おもむろに父は語り始めた。

「ゆりあ・・・実は、お前には、兄と双子の姉がいるんだ・・・」

「えっ？・・・じゃあ・・・なんで私一人をお父さんが引取ったの・・・」

「それは・・・」

父は語りだした。

「お前が小さい頃の・・・」

わしと母さん・兄・姉そしてゆりあの5人家族で楽しく暮らしていた。

しかし

わしが事業に失敗し、生活が苦しくなっていた。

家計を支えるため、働いていた母さんが病気で入院したんだ。

そんなある日のことだった。

元々、結婚に反対だった母さんの両親が病院にいた母さん、家にいた兄、姉、そして、ゆりあを無理やり連れ戻ろうとした。

そして

仕事が終わって家に帰ったわしを待っていたのは、泣いていたお前ゆりあだった。」

「なんで私だけが？」

「多分、お前だけどこかに隠れてたんだろう。・・・」

怖くて・・・

そして

わしに泣いていたのをよく覚えている。」

「・・・」

「実は、後日お前を引取りに母さんと両親が来た、

その時母さんと別れるのを決意した。

そして

お前も母さんの元へ渡そうとしたんだが

わしの元を離れたくないと泣いたな・・・

本当は、母親にと思ったんだが、

みんなで説得したんだがわしにしがみついて離れなかったんだよ。

だから

わしは、責任もって立派にこの子だけは育てることを約束して、お前を引取ったんだ。」

69

「じゃあ、なんで、別れたのおとうさん達は？」

「それは、母さんの病気がひどかったからだ。」

「なぜ？」

「あの時のわしの力ではどうにも出来なかったんだ。」

「じゃあ・・・お母さんは？」

「生きてるよ。」

「そう。よかった。」

「数日後、母さんはお前にとそのミサンガを渡しにきた。」

お守りとして、

そして、

兄妹にYKのイニシャルの入ったミサンガを渡したと言っていた、

「えっ？YK？」

「YK、兄の裕樹、姉のゆきえ、そしてお前・・・」

「なぜKなの？」

「小林のK、母さんの旧姓だ。」

「それでお母さん達は？」

「それを渡したら連絡が途絶えた。」

「どうして？」

「アメリカに行った。」

「じゃあ・・・なぜ・・・元気だと。」

「お前の誕生日にはがきが届いてたんだ。エアーメールで・・・最近はないけど」

父親はそれを出した。

それを読むゆりあ……

「ゆりあ……すまん……」

「お父さん、あやまらないで……何も悪くないわ……」

家に戻ったゆりあ……

自分のミサンガを見て

樋口……翔……

なぜ、あなたがこれを持つてるの？

ひょっとして……？

実のお兄さん？

それとも？

だから？

あの時、ドキッとしたの？

それとも？

自問自答していた。

その頃、翔は、一人ミサングを見て、考え事をしていた。

そこに

「お兄ちゃん!!」

裕子が入ってきた。

「わっ!!」

驚く翔

「どうやって入ってきた!!」

「どっやってって・・・ドアからよ。」

「勝手に入ってくるなよ!!」

「勝手にって・・・何度もノックしたわよ。しかも、ああって返事したくせに。」

「えっ？」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「何もないよ……」

「ひょっとして、新しい人が出来たの？」

「ちがうよ……」

「さつき、奈々枝から電話あったんだけど……」

「なんだよ……」

「好きな人でも出来たの？」

「どういう意味だよ……」

「分かりやすい……お兄ちゃんって……で……どんな人よ。」

「いいだろう……別に……」

「ふーん……じゃあ……がんばってね……」

裕子は部屋を出て行った。

「余計なお世話だ。」

見つめる瞳

再婚しても、子供の名前まで変えないよね？と悩むゆりあ・・・

その前に、私は、彼のことが好きなの？と考えると胸が痛い

もし、彼がお兄さんだったら・・・

大変だ・・・

やっぱり・・・

無理よねと思いつつ・・・

気付いたら朝だった・・・

プロジェクト会議に出るゆりあ・・・

あのことが気になって仕方がなかった。

そして

気付くとつい翔を見ていた。

一方、翔も気付いたらゆりあの方を見ていた。

時々、目が合いそらす二人・・・

やがて、会議が終わりに同僚の一人が声をかけてきた

「石原さん・・・大丈夫？」

「どうして？」

「どうしても。何も・・・見すぎですよ。樋口さんを・・・」

「そんなに見てましてか？」

顔を真っ赤にするゆりあ・・・

「ええ・・・」

「うそ・・・」

「でも・・・」

「でも・・・」

「樋口さんも気があるのでは？」

「なぜ？」

「樋口さんも見てましたよ・・・あなたを・・・」

「えっ？」

さらに驚くゆりあ。

「まあ・・・じゃ?」

「じゃー」

ゆりあが、会議室を出ようとするよ。

樋口が立っていた。

「あれ? 奈々枝は?」

聞くゆりあに

「今日の打合せは?」

「打合せ?」

不思議そうに見るゆりあ

そして、

「あっ・・・」と声をあげた。

「ついでだから・・・お茶でもしながら、打合せませんか?」

そう翔が言って、二人は、近くの喫茶店に入った。

「あの・・・」

同時に話しかける二人・・・

「そちらこそ・・・」

「いえいえ・・・樋口さんこそ・・・」

「この間ありがとうございました。」

「えっ？」

「これですよ。これ・・・」

腕をまくりミサンガを見せる翔

「あっ・・・」

驚くゆりあ、

「あ・・・・・・」

コーヒーを口にするゆりあ

だいぶ前のことよねと考えていると

「お兄ちゃん!?!」

声がした。

二人が振り向くとそこには、裕子がいた。

「裕子・・・どうしたんだよ」

「いや・・・別に・・・偶然よ。奈々枝とここで待ち合わせしたただけだから。」

そっぴいっつ、なぜか、ゆりあの横へ座った。

「すみませ〜ん。ホットひとつ」

「ふ〜ん・・・この人がお兄ちゃんが好きになつた人か・・・」

ゆりあをまじまじと見る裕子

裕子？えっ？と驚きながらゆりあが

「あ〜」と声をかけようとする

「私、妹の裕子よろしく。」

と握手をしてきた。

「石原ゆりあです。」

「ゆりあさんか〜へえ〜ところで、何歳？」

「25です。」

「25?私と同じ?」

会話をしていると裕子は奈々枝を見つけ

「あつ、奈々枝!!こっちこっち」

裕子が奈々枝を呼んだ。

「じゃあ。しばらく、仕事に戻ってね。」

二人は言われなくても、仕事の打合せをした。

「裕子!」

現れた奈々枝、横にいる二人を見て・・・

「なんで二人が?」

「仕事の打合せだって」

「ふーん?、樋口さん」

翔の横に座った。

「ところで打合せは」

「まあ・・・終わったけど・・・」

そう答える翔を見て、

「じゃあ・・・連れて行ってもいいわね。裕子ごめんね」

奈々枝は翔の腕を引っ張り、連れ去ってしまった。

裕子と二人になったゆりあ・・・

「よいしょ」

ゆりあの前にすわる裕子・・・

「邪魔者は、いなくなったわね。」

「えっ・・・？」

「ゆりあさん・・・」

「はい・・・」

「お兄ちゃんを頼むわね。」

「そう・・・言われても・・・」

戸惑うゆりあに、

「なに言ってるのよ。この仕事をしてからお兄ちゃん、元気になったんだから。」

「そんな・・・」

「じゃあ・・・」

裕子が去って行った。

「もう・・・」

ゆりあが我に帰ると4人分の支払いが残っていた。

どうしたらいいの？

この日は、前から雄太と会う約束をしていた。

ゆりあにとっては、いつものことであったが、いつもと違うことがひとつだけあった。

それは夕食を食べる場所を覚えてくれないことだった。

一体どこなの？と思いつつ会社を出るゆりあ・・・

その時、ゆりあの携帯が鳴った。

「はい。」

「ゆりあか？」

「雄太さん？一体どこ？」

「前！！ま・え！！！」

ゆりあが目の前を見ると車から手を振る雄太がいた。

「雄太さん、どうしたの？」

「まあ・・・いいから。乗れよ。」

ゆりあを乗せて雄太の車は走って行った。

しばらくして、二人はレストランに着いた。

その頃、奈々枝は、翔を連れて食事に来ていた。

「そろそろね・・・」

「なにが？」

「どうしようかな？言っちゃおうかな？」

「なんだよ・・・もったいぶって」

「実は・・・」

レストランで食事をするゆりあと雄太

デザートが出てきた頃に、

「これ・・・」

雄太が指輪ケースをゆりあの前に出した。

「これは？」

「あけてみるよ」

ケースを開けるゆりあ・・・

そこには、婚約指輪があった。

指輪を見つめるゆりあに

「結婚してくれないか？」

雄太が語りかけた。そして、ゆりあを見ると

両目に涙を浮かべ、やがてほほをつたわって落ちた。

「結婚してくれるね。」

雄太が念を押すと

「・・・」

「えっ？今？」

「ごめんなさい・・・」

か細い声が出た。

「うそだろ・・・ゆりあ・・・」

「ごめんなさい・・・」

立ち上がり、その場を去って行った。

追いかける雄太・・・

「待てよ・・・」

その頃、奈々枝と翔が

「どうしても行くの？」

「ああ・・・」

「なぜ？」

「わからない。けど・・・」

翔が走って行った。

走って何になる？と自問自答しながら翔は走った。

ゆりあに追いついた雄太。

「どっしたんだ？」

ゆりあの両肩を持ち、自分の方を向かせて聞いた。

「ごめんなさい。」

ただ言うゆりあ

「謝るだけじゃわからないだろう。おい・・・」

それを聞いて

「私に、はいと答える資格がないの・・・」

「どういう意味だ。」

「わからないの。」

「やつか？樋口か？」

「わからないの。」

雄太を振りほどいて走った。

そして、赤信号の横断歩道へ突っ込んで行った。

「あぶない！！」

叫ぶ雄太

クラクションの音と共にキキッというブレーキ音が鳴り響く

ドンという鈍い音が鳴った。

ふと見るとゆりあは、元の歩道へ飛ばされていた。

そして、路面には、翔が横たわっていた。

それを見たゆりあ

「樋口さん！！大丈夫？」

救急車で運ばれる二人・

軽症だったゆりあは、雄太と処置室の前の椅子で待っていた。

「どうしよう・・・」

涙を浮かべるゆりあ

「だいじょうぶだ・・・」

慰める雄太。

「お兄ちゃん。大丈夫なの？」

裕子があれわれた。

そして、処置室に呼ばれた3人、

「軽症です。大丈夫です。」

よかったと喜ぶ3人に医者は

「頭を打ってるみたいですよ。だから、来週にでももう一度、病院へ来てください。」

病室で目を覚ます翔、そこには、ゆりあと雄太そして、裕子がいた。

ゆきえの前で

ベットの从上からゆりあを見つけた翔、その姿を見て

「大丈夫ですか？」

「ええ・・・大丈夫よ」

涙を浮かべ返事をするゆりあ

それを見て、雄太は、処置室を出た。

大きなため息をして、壁を叩いた雄太

どうして、俺じゃないんだ・・・もう・・・だめなのか？

そう思いつつその場に立ち尽くしていた。

翔を見つめるゆりあ、

しかし・・・

どうしたらいいの？

という言葉が脳裏を駆け巡った。

「ゆりあさん・・・大丈夫だから」

そう言い裕子がゆりあの肩をポンと叩いた。

「そう・・・じゃあ・・・」

ゆりあが帰ろうとすると

「ゆりあ・・・大丈夫か!」

お父さんが駆けつけてきた。

「大丈夫よ・・・」

「そうか・・・」

お父さんと一緒に帰った。

帰り車の中で

「実は・・・お姉さんの件だけど・・・」

「あとにしてよ!」

数日後、ゆりあの携帯に樋口から連絡が入る

「無事退院した。」

「ごめんなさい。」

「いいよ。また、会えないか？」

「またつて？」

「明後日の日曜日でも？」

「わかったわ・・・」

家に帰るとゆりあの父が待っていた。

「ちょっといいか？」

「何？おとうさん？」

「実は・・・」

言葉に詰まる父・・・

「どうしたの？」

神妙そうな父の面持ちに、不安がよぎるゆりあ

「実は・・・」

「えっ・・・？」

「ゆきえが・・・1年前にすでに、亡くなっていた。」

「どういふこと？」

「この間、連絡が入ったんだ！」

「隠してたの？」

「俺も知らなかったんだ。」

父はある手紙を渡した。それを見るゆりあ・・・

実の母からだった・・・

「で・・・」

「で・・・とは？」

「どっかにいるの・・・」

「どっかは？」

「おねえさん・・・」

父は、住所の書いた紙を渡した。

そして、

「来週・・・お母さん達と会うことになったから・・・」

ゆりあは姉のゆきえの墓参りに出かけた。

そこは・・・

翔と初めて出会った寺だった

翔と出会った時の風景がよみがえる。

ふとわれにかえるとすでにイチョウの葉が落ち殺風景な風景になっていた。

ゆりあは、境内を抜けて墓所に向かった。

そして

ゆきえの墓の前で、一人手を合わる男性がいた。

翔だった。

ゆきえ・・・好きな人が出来た。

よろこんでくれるよな？

彼が祈っていたのだった。

その姿を見てゆりあは、手に持っていた勺を落とす。

コトンという音が響き、その音に気付いた翔が振り向いた。

「石原さん？なぜ？」

近づくと……

「おはようございます」

ゆりあが

「樋口さんこそ……」

言い近づいて行った。

そして

樋口がいる墓を見るとゆきえの墓だった。

「どうしてここに……」

再び聞くゆりあ……

翔はゆっくり立ち上がり

「……」

「……」

「墓参りに……」

「……」

「石原さんは？」

「わたしも墓参りに？」

ゆきえの墓の前に立った。

「ゆきえとは？」

「お姉さんなの・・・」

「そうか・・・ゆきえの妹か・・・」

「そういう樋口さんは？」

「ゆきえ・・・か・・・」

言葉を濁す。

ゆりあの脳裏に翔が一年前に彼女を亡くしたことが蘇った。

「ひょっとして・・・」

「そう・・・」

少し暗くなる翔。

そして

「でも、今日は、ある報告をしたんだ。」

「報告って？」

「好きな人が出来た。」

「好きな人って？」

「君だ・・・」

「えっ？」

「石原さん・・・あなたのことが好きだ。」

両手で口を押さえるゆりあ・・・

頭がカーツとなっていた。

そこへ近づいてきた翔、

やがて

ふわーっと包み込むように

彼女を抱きしめた。

彼の腕の中・・・

「ごめん・・・やっぱり駄目」

腕を振りほどくゆりあ

その言葉聞いて戸惑う翔

「どろろっ」

「どろろっって・・・」

「あなたは、私じゃなくて、お姉さんの面影を追ってるのよ。」

「ちがう・・・」

「ちがうって?」

「どこが?ちがうって言うの?」

しばらく、向き合う二人・・・

翔は少し頭が痛くなってきていた。

「おれは・・・」

その痛みはだんだん大きくなってきて

目の前が暗くなってきた。

「樋口さん!!」

言うゆりあの声がだんだん遠くなっていった。

本心

慌てて駆けつける裕子・・・

「ゆりあさん！！お兄ちゃんが倒れたって。」

「ええ・・・」

落ち込むゆりあ。

「ご家族の方ですか・・・」

「はい・・・」

答える裕子

そして、先生に呼ばれて行った。

暗くなって戻ってきた裕子・・・

「どうだったの？」

「とりあえず、応急処置ですんだんだけど・・・」

「けど・・・」

「再度、手術が必要だった。」

「どうしようもないよ？」

裕子は医者言葉の言葉を思い出した。

「脳内で出血してます。今日は、とりあえず血を除くことが出来ましたが後日、止血しないとイケません。ただ・・・」

「ただ？」

「記憶に障害が残るかもしれません。」

「そんな・・・」

しかし、裕子は、障害の可能性については、言うことが出来なかった。

「ゆりあさん・・・今日は大丈夫だから」

「そう・・・」

ゆりあは、家に帰った。

その翌日、ゆりあは、初めて自分の母と兄に会うことになっていた。

顔合せはとあるホテルのカフェだった。

緊張するゆりあ・・・その横には、父と一緒にいた。

やがて、母親と兄があらわれた。

「こんにちは・・・」

お互いよそよそしい挨拶のあと母親が謝ってきた。

「ゆりあ・・・ごめんね・・・」

「そんな・謝らないですよ・・・」

「あなた・・・ゆきえとちがって私似ね・・・」

「えっ？」

不思議がるゆりあ

「これ・・・」

母親は、写真を見せた。

「これは？」

「あなたのお姉さんよ。」

「えっ？」

驚くゆりあ・・・

そこには、ゆりあと全く違う雰囲気女性の写真が

「私達双子よね。」

聞きなおすゆりあ

「そうよ・・・二卵性のね・・・」

家に戻って考えるゆりあ、翔の手術は明日に控えていた。

そして、昨日の自分の行動を後悔していた。

なぜ・・・？

素直に？

本当は自分も好きなくせに・・・

どうしよう・・・

そう思い悩んでいるとそこへ携帯が鳴った。

「もしもし」

「あっ！ゆりあさん？裕子だけど・・・」

「はい・・・」

「明日、手術前に絶対来てね・・・」

「でも・・・」

「でも・・・て？」

「昨日、わたし・・・」

「聞いてるわよ・・・おにいちゃんから・・・」

「えっ？」

「本心を伝えたいからって・・・」

「本心？」

「じゃあ、来てね。」

記憶

ゆりあは悩んでいた……

行くべきかどうか。

そして

自分の行動に後悔していた。

そこへ

再び携帯が鳴った。

裕子からだった

「はい……」

「なにやってんのよ!!早く!!時間がないよ!!」

悲鳴と言うより叫び声がゆりあの耳に飛び込んできた。

そして、ゆりあは、病院へ向かった。

病院へ向かうゆりあ。

その前に奈々枝が現れた。

「一体どうなってんのよ。」

ゆりあに食って掛かる奈々枝

「ごめんなさい、時間がないよ。」

早く行こうとするゆりあの手を引き足止めをする奈々枝

その時、雄太が二人を見つけた

「あたしの応援をするって言ったじゃない。」

「今は、それどころじゃないの!」

「裕子から聞いたわ!このドロボー!」

「ごめんなさい。奈々枝ちゃん。でも、もう行かないと!」

「どづいつことよ!」

「ごめん・・・」

ゆりあは小さな声でいう

「どづいつことよ!」

再び奈々枝が叫ぶ

ゆりあは、奈々枝の方へ振り向き、涙を流しながら直立不動で叫んだ

「私の好きな樋口さんの手術がはじまるのよ!」

その光景に驚いた奈々枝

「いま・・・なんて・・・」

ゆりあの手を握っていた力が消えてきた。

「ごめんね・・・すきな・・・ひぐちさんのこと・・・」

その一言で、奈々枝の手がすつと離れた。

「だから、行かせて・・・」

言い残しゆりあは、走り去った。

手術の時間が迫っていた

やがて、看護師が手術の準備にやってきた。

「もうすぐ手術です」

翔を搬送用のベットに載せた。

そして

時間が来た、病室から出る翔、

その頃、ようやくゆりあが病院に着いた。

廊下を押され手術室に運ばれる翔、

「樋口さん!!」

ゆりあがあわれられ、ベットと一緒に歩く

彼女に気付いた翔・

「石原さん・・・僕は・・・ゆきえに似ているからじゃない・・・」

「うん・・・」

「ただ・・・ただ・・・」

「うん・・・」

「ただ・・・君のことが好きなんだ・・・」

「うん・・・」

「だから・・・」

手術室に入って行った。

それを見届け・・・涙するゆりあ・・・

横で裕子が「お兄ちゃん・・・」とボソツと言った。

二人は軽く手を握りしめ涙していた。

手術が始まった。

手術室の前で並んで座る二人

「石原さん……」

話しだしたのは裕子だった。

黙って裕子この方を見るゆりあ、

「実は、記憶に障害が残るかもしれないの……」

「えっ？」

「どんな症状になるかはわからないけど……」

どう答えたらいいのかわからいゆりあ

「お兄ちゃんは、多分、石原さんのこと、忘れないと言いたかったの。」

「ごめんなさい」

その言葉にしばらく黙るゆりあはしばらくしてぼそつとつぶやいた。

「ありがとう……」

しばらく二人には、沈黙が続いた。

ゆりあは、翔と出会った頃を思い出していた。

手術が終わった。

しばらくして、翔の目が開いた。

「お兄ちゃん」

「ひぐちさん・・・」

翔の目の前には、二人の女性が立っていた。

「裕子か・・・」

声が出たがもう一人がわからない。

そして、「この方は？」と聞いた。

誤解

病室を飛び出すゆりあ・・・

「ゆりあさん!」

裕子は声をかけ、ゆりあを追いかけた。

しばらく走って、病院を出て、木陰で泣いているゆりを見つけた。

「ゆりあさん・・・」

「ごめんなさい」

「仕方ないわよ・・・しばらく様子を見ましょう。」

「そうね」

「元気だしてね。」

「はい・・・でも今日はかえるわ・・・」

「そうね。」

二人は分かれた。

病室に戻った裕子

「裕子・・・」

「なに？」

「さっきの人・・・」

「お兄ちゃん・・・覚えてるの？」

裕子が聞きなすと、しばらく、考え込む翔

そして、首をひねり

「わからない。」

そこに担当医がやってきた。

「気分はどうですか？」

「特に・・・」

「そうですね・・・」

そう言う医者に声をかける裕子

「先生・・・」

「なんですか？」

「ちょっと記憶がないみたいなんです。」

「どのくらいですか？」

「それはわかりんですけど・・・」

「と言いますと。」

「私のことは覚えているんですけど」

「はあ。」

「一緒に来ていた人のことは覚えていないですよ。」

「と言うことは、最近のことを覚えてないってことですか？」

「そうみたいなんです。」

「しばらく、様子を見て、リハビリをしましょう。」

担当医は出て行った。

数日後、奈々枝がお見舞いにやってきた。

「裕子、大変だったわね・・・」

「まあ・・・ね」

「樋口さん・・・こんにちは」

奈々枝が声をかけると

不思議そうに奈々枝を見る翔の姿がそこにあった。

「どうしたの？わたしよ！わたし」

「どなたですか？」

「樋口さんの彼女の奈々枝よ！！」

「ちょっと！！奈々枝！！」

裕子が声を上げ、手を引っ張る

そして

「な・・・何よ！！」

そういう奈々枝を無理やり病室の外に引っ張り出した。

「なんなのよ！！一体！！」

怒る奈々枝に

「お兄ちゃん、今、調子悪いから・・・」

「は？」

「記憶が混乱しているの」

「どづいづいと？」

「一部記憶がないみたいなの。」

「そうなの。」

病室に戻ろう二人に、

「樋口さんですよ。すみません」

裕子は看護師に呼び止められた。

看護師と話をしている裕子が奈々枝を先に病室に入れた。

「奈々枝、先行ってて。」

しばらくして、裕子が戻ると奈々枝はすでにいなかった。

「あれ？奈々枝は？」

「もう帰った……」

「……」

「ところで、石原さんって、どんな人？」

「ああ・・・お兄ちゃんが目を覚ましたときに一緒にいた人よ。いつも見舞いに来てくれる。」

「そうか」

窓の外を見る翔

「どうしたの、何か思い出したの？」

「いや・・・べつに・・・」

翌日、ゆりあが見舞いに行くと、そこには翔しかいなかった。

「こんにちは。」

「ああ・・・」

「だいぶよくなりました？」

ゆりあの言葉に、チラッとゆりあの方を見る翔、そして、

「もう来なくていいです。」

「えっ？」

「だから、お見舞いに来なくていいですから」

驚くゆりあ

「なぜ？」

「あなたの顔も見たくない出て行ってくれ!!」

廊下でその声を聞いた裕子、慌てて病室に入ってきた

「お兄ちゃん!!何言ってるのよ!!」

裕子を見たゆりあは、何も言わず、病室を出て行った。

「ゆりあさん・・・」

「お兄ちゃん!!一体どうしたのよ。」

「あいつが!!邪魔をしたんだ!!」

かなり興奮した状態の翔、しかし、ゆりあの悲しそうな顔がよみがえる。

「なんの邪魔をしたのゆりあさんが」

「お前は知っているだろう。」

「何のことよ。一体」

そういう裕子の方を見る翔・・・

しばらくして、目から涙が出てきた・・・

「あれ・・・？」

驚く翔

「どうしたの？」

裕子が聞くと

「わからない・・・」

「で・・・一体、何があったの？」

奈々枝が翔の恋人で、その仲を引き裂こうとしたのがゆりあだと聞かされたとき翔が語った。

二人

病室を出たゆりあ・・・

ただ・・・

ただ・・・

悲しみが止まらない。

すぐに、タクシーに乗り、家に帰った。

その頃、裕子はこれまでのことを話した、ゆきえの死・・・

ゆりあとの出会い、

そして

事故まで

しかし、翔は、ただ困惑するだけだった。

部屋で一人泣く、ゆりあ・・・

携帯がなる・・・携帯をみると、裕子からだった。

しばらくして、携帯をとった。

「もしもし・・・」

「ゆりあさん・・・私、」

「裕子さん・・・」

「今日、ごめんね。」

「・・・」

「どうも、記憶が混乱したみたい。」

「そう・・・」

「だからお兄ちゃんを責めないで・・・」

「わかったわ・・・」

そして、ゆりあは決意した。もう彼に会いに行かないことを、

ゆりあが見舞いに来なくなってから数日が過ぎ、翔は退院した。

数日後、ゆりあの姿は、ゆきえの墓の前にあった。

ごめんなさい、お姉さんの彼だもんね・・・

付き合うのも反対よね。

ごめん・・・

気付かなくって。

今日で、彼のことを忘れるから。

墓前で一人心で話しかけていた。

気付くと涙がほほをつたわっていた。

しばらくして。

涙をぬぐって、立ち上がるゆりあ。

境内ですべて葉の落ちたイチョウの木を見た。

そして、

初めて翔と会った時を思い出した。

写真を撮っていた位置にゆっくり歩き、両手でカメラのフレームをつくり覗いていた。

すると

チラリチラリ

雪が舞ってきた

あつ……雪だと思いつつ空を見上げ、再びフレームの中を見た。

そこには翔の姿があった。

驚いたゆりあは、ただ雪の中にたたずむ彼をしばらく見つめた。

翔はゆりあに気付き近づいてきた。

「あの〜」

そう声をかけ、さらに近づく翔

「はい……」

「ごめん……この間」

「いえ……」

うつむくゆりあ。

翔はただ、彼女を見つめていた。

「ちょっといい?」

彼女を連れて、ゆきえの墓へ行つた。

「どつしてここに？」

「裕子から聞いて・・・」

「そう・・・」

「あいさつしとかないと・・・」

そう言つて、翔はゆきえの墓に向かつた。

一人拝んでいる翔は、おもむろに立ち上がり、彼を見つめる

ゆりあの方へ振り返り歩みだした。

そして、ゆりあをそつと抱きしめた。

ただ呆然と立ちすくむゆりあ・・・

その耳元で翔はささやいた

「ごめん・・・君が来なくなつて・・・ただ・・・ただ・・・君に会いたかつた。」

「うん。」

「これから一緒にいてくれないか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7978o/>

ある秋晴れの日

2011年8月18日21時06分発行